

詩
誌

樹外



163

2011

繭倉の在る場所で

田中 真由美

八倍に肥大したハ丈桑の巨大な葉群れが
並木になつて枝垂れる市役所通りは

さわさわ ざわざわ さわさわ ざわざわ

葉ずれと葉を食む音が

澄ました耳に 寄せてはひいていく

海のむこうの大陸に学ぶ仕草で

うす翠の光る糸を繰るとき

夜の燐粉を生臭くただよわせ

この地を潤させたもの が蠹く

有機から無機へ進化した幼虫の歴史

繋ぎ続けるベンゼン核の総称

ファイバーと名付けられた一族を

守り続けた場所に標される 桑の葉の文様

降り積もる時は

百年の幹の先の先に

張り巡らした命を紡ぎ

ひとつひとつに時間を憩わせ

蜂の巣のように連なる部屋から

いくすじもの糸が繰られ

燃り合わされていまを 拓く

コンピューターが覗きこむたび

数字や図形 色をとりだす場所では

時間を手なずけては

できない を できる に書きかえている

そしていま 八丈桑が見守った卵が

世界へ仕草を返す

燐粉は街に煌めき

街は さわさわと世界へひろがり続ける

窓

言語のみずみずしさを認識させる詩集たち

田中 真由美

作田 教子詩集「地鏡」

—ぼくとわたし半身を生きる 哀しみのいのち—

地鏡とは、此岸と彼岸を隔てる場所。地表を境に地上に生きる生者と、地下に眠る死者が隔てられるが、作田の世界ではそのどちらの方向にも世界が開かれていて、一方は他の一方を映し、互いを補っている。詩集中においても、上段と下段に書き分けられ、上段は祈りのように響き下段「此岸の地」は哀しみの現実を突きつけてくるようだ。

河は薄暗がりの 由／半身はあたたかい水／
半身はつめたい水／ 「彼岸の鏡」部分

「生」とは、「果てのない未来へとベッドの幅ほどの落卜」であり、「完結の匂いのする産み月そこからはじまる苦」を孕む。「生まれることで刻印される重力」が「終わりのない落卜へと昇っていく視線」を放つあわいの水際。「(ぼくの後ろ姿)」、「(わたしの哀しみ)」が映り、生きものはみな「生」へ「残酷に解き放たれる」。

此岸では「生」は「性」として「半身は凍る血」、「半身は燃える血」に分かたれるため、羽はひとつとなり「地にも着けない、天にも昇れない／ここ、苗吊りの視線から／手を繋ぎ、片翼を不器用に羽ばたかせて」「身体中の毛を逆立てて 咆哮する」半身、求めあう半身。青春は求めあう引力の磁場が強く、重力に押しつぶされる。

ていねいに折りたまたれた履歴書の（まるでぼくが折りたたまれた翼）反語としての未来は無造作だ 歌おうとするものが身体の片隅に生まれ、口唇はかすかな震えまで閉じてしまふ、声は無い／汚れたスニーカーは翼が折れ方向が定まらない／声の手前で消滅してしまうものを化石のように並べている

(中略)

春に埋もれ／ぼくは毎夜 胎児のかたちのまま眠る／
未だ 眼も耳も口も途上のままで

(此岸の地 (埋もれる春) 部分)
ひとつになることの不確かさが哀しみを生み、繰り返し絶望的に詠われる詩句。

お互いを希求する その速さ／鏡面は胸に張り付いたまま／映すはずの半身を求め／狂おしく 鏡面を抱く／／ぼくらの半身は／(問い合わせ)を発し続ける／(問い合わせ)は永遠に(答える)に出会えない／(中略)／神がいなくなつた 確信

(※)39P部分
(この街は失くしたものは忘れてしまってけれど、失くしたといふ喪失感だけがふくらんでいく街だよ)／いつしかわたしもトンボの眼になつて、虫を捕まえて食べながら、失くした

ものを忘れてしまっているのに、失くした大きさに眼を回転させて世界をみつめ、背中には羽が生えてきたのに、わたしはどいに飛んでいったらいいのかがわからなかった。

（此岸の地（失う人々）部分）記憶はあるいは忘却だらうか、わたしが在る場所を忘却の彼方に押しやり、わたしが消滅した場所を記憶しようとする

（此岸の地（忘却へ）部分）

痛み、哀しみを、「死」の手前で「忘却」という媚薬が覆っていく。「生」と「死」の狭間に横たわる「地鏡」が映し出す物語。「生」を再度問う詩集である。

丁海玉詩集「いぐいのきまり」

— まだになつた句読点を解く —

丁海玉は川崎生まれの在日女性詩人で、法廷通訳人という特殊な職業に就き、日本語と世界を繋いでいる。自ら韓国語と日本語というふたつの言語を持つふたつの文化を生きることにより、他者の痛みに寄り添っていく。

はつおんのしくみがちがいまして／にいるときと、に／らないときがあるのです／てんてんは、つくときつかないときがあるのです。／（中略）名前の持ち主はもういちど／言う态度をはじめる／舌にのせてよくよくまるめてこねる／鼻から空気をすって腹にためる、それから／ぶつ、と、なまえの音をとばしてみせた／ぐんぐん飛距離がのびていく、そのむ

こうを／みんなが眼で追っていく／てんてんだったのかでんでんだったのか／つまりそういうことなんです／澄まして言いながら／手もとを見ると、てんてんがひとつ／こぼれ落ちていた／サボタージュしたのか降り落とされたのか／頬を赤らめ、こつそりしている／てんてんだった／人差し指と親指でつまみあげる／知らん顔してポケットの中に／しまい込んだ／／

名前ひとつにしても正確に伝わらない国で、下される判決への不安、その実刑。だからこその真剣勝負。

つるつるあたまのこの人は、こんな狭い接見室の中で石鹼の匂いをばらまいている。たった今お風呂からあがったばかりで上気したほっぺたが赤い。「」でつかう石鹼の色とか考え方でしゃべりまくる。おいていかれるのがこわくて、わたしも、ソンナコトドウテモイイ、オレガイイタイノハ、アダモナクテ、ソウデモナクテ、コウナンダ、って、目つりあげて追いかける。ああこの匂いはミルキイ牛乳石鹼、握っていたのはどんな手だったか確かめたくて背を伸ばし覗いても、腹の下にもぐった手はみえない。灰色のコンクリートの壁がせまってきてパイプ椅子は冷たい。息して訳する口の中へすべり込む匂いは生ぬるい。

ラピート・関西国際空港行のアクセス特急の名称

（匂い部分）被告の通訳を通じ言語は、現代日本を鋭く切ってみせる。

樋口 伸子詩集『ノヴァ・スコティア』

—言葉が楽しげにスキップを始める—

(中略)

図書館司書を思われる樋口の第五詩集には、「旅」と
はいっても」の中に登場するロシアの映画監督タルコフ
スキーの哲学が秘められているようだ。「過去は記憶の
なかに存在する現在であり、現在それ自身も、過去の記
憶のイメージの一つの複合である。このようにしてう
つろい行く記憶のなかに「永遠」が存在している」とい
う考え方である。この哲学を軸とし、樋口流に様ざまな
手法で一篇一篇を描き、巧みなストーリー・テラーに導
かれ、おかしみの中に現在の闇を映しとっていく。

都会の達みに／見捨てられた家／

忘れないよベコちゃん（中略）
その笑顔こわかったよ／あれは誰？／

〔「夜の庭」部分〕

見捨てられた庭／ここにどんな家があつたのか／

傾いた扉が開いて／今にも誰かが出てきそうだ／

食器のふれあう音／階段のきしむ音／
仮間のにおい／おとうさんの舶来ボマードのにおい
おかあさんの腋から／いいにおい／喧嘩のあとに塩辛い
涙のあじ／夜の団葉には幽靈もまじって／

(中略)

センユウは墓でしか会えない／シンユウはここる移ろう／
夏が過ぎれば暗黙の別親友に／それがシンユウの時の法則
／わにわにわに笑いながら／シンユウは登録も変更届もしな
い／ボコちゃんは大きなのびをして／ふらりと新しい道の角
を曲がった　(後略)　(「ベコちゃんと親友」)

といひで／あんた 誰？／

空き家には空き家の

荒れ庭には庭の事情があつて
夜」と繰り返される家の年代記

「素返」、「帽子の理由」の自我の確立、言葉の記号としての役割と、それを越える自由な遊び心がスキップする「バベルの部屋」、「小夜曲」、「うまおいかけて」など最後までやめられない「かっぱえびせん」のごとき詩集。「本はエライと思うこともあつたが／エライと思う人はめたにいなかつた」と樋口の視座が鋭く見据える。